

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第51回



子どもたちに伝えることば（その2）

まず信頼関係を築くことから2

★一流選手の条件とは？

数年前、あるセミナーに道場生と参加しました。その講師の先生から「自分から積極的に教えてもらおうと質問をしたり、感謝の気持ちを表したり、大きな声で返事をしたり、そういったことができない人は一流選手になれません」とご指導を受けました。

本当にその通りで、日本そして世界トップクラスの選手たちは例外なく、礼儀正しく、受け答えもしっかりしていて感心します。しかしながら、本当にあいさつや返事の声が小さい子は、可能性の無い子なのでしょうか？

道場入門以来、一度も大きな声で返事できなかった子たちが過去に何名かいましたが、試合では燃える闘志があり、稽古も全力で取り組んでいました。

★声が小さい子はダメな子？

15年ほど前に私が本格的に空手指導を始めた頃は、子供たちが大きな声で返事をするまで100回でも200回でも名前を連呼し、10分以上にわたって何度も何度も繰り返し返事を強要しました。数人は、途中から泣き出してしまいましたが、そんなことにはお構いなく、いつまでも私の理想とする返事ができるまで繰り返し返事させました。

そうやって何人かの子供たちが道場を辞めていきました。私はまだ若かったので、「根性のない奴だ、あの子たちは空手には向いていない」などと子供に問題があるとして片付け、自分を正当化していました。

今では自分が間違っていたことに気付き、当時の子供たちに申し訳なく思っています。

★昨日の自分と今日の自分を比較

また、数年前に別のセミナーに行った話ですが、あいさつや返事が蚊の鳴くような声で、きちんとできず、私はがっかりするとともに恥ずかしい思いをした道場生がいました。

その子が、セミナー翌日に私に空手ノートを提出してきました。そこには数ページにわたってびっしりと「いかにセミナーが楽しかったか」、「講師の先生方への感謝の気持ち」、「次の試合での優勝への決意」が綿々と熱くつづられていました。

そういった子供たちを見ていくにつれ、子供たちにもそれぞれ個人差があるのだと気づきました。

もともと地声が大きく返事、あいさつの方が元気いっぱいでもいつも褒められる子、また社交性があり講師の先生に人懐っこく質問に行ったりできる子がいます。そういった子は、例外なく指導者に好かれて得をします。

その一方、どうしても人前で大きな声が出せない子がいますが、同様にその子たちも先生方への感謝の気持ちもありますし、上手になりたいという強い気持ちもあります。そういった子が、自分なりに限界の大きな声を出しているつもりが、周りから見ると、やる気が無いように見えることがあります。そのような場合、他の子と比べるのではなく、昨日のA君と今日のA君を比較して、少しでも成長していればそれを評価します。

昨日まで返事ゼロの子が、たとえ小さい声でも勇気を振り絞って返事できるようになったのなら、その勇気を褒めたたえなければ二度と声を出さなくなってしまうでしょう。

努力したその子に「もっと大きな声を出せ」と叱るのは間違っています。

他の子と比較をしていると、大人しい性格の子はいつまでたっても「やる気のない子」、「声を出せと言っているのに、言うことを聞かない子」になってしまいます。それを“甘やかしている”と考えることもできますが、それでは、そのような子への指導を諦め、かつ排除していることになるのではないのでしょうか？

★それでもじっと待つ

そのような子たちはなぜしゃべってくれないかと言いますと、指導者を信頼していないからです。何もしゃべらない子、返事をしない子は、指導者の目を見て貝のように口を閉ざして固まってしまいます。そんな子も、家ではお母さんと笑いながら楽しくおしゃべりしているはず。氷に少しずつお湯をかけて溶かすように、根気よく勇気づける声掛けを続け、信頼関係が築けるまで“じっと待つ”ことが大事です。

そのような子たちがしゃべらないのは、安心して声を出せる環境にない、“この大人なら大丈夫”という安心感・信頼関係が指導者との間に築けていないからです。

よって、「声が小さいって言ってるんだよ！」と叱ったり、「何、その返事。それしか声でないの？」と失望・幻滅したような声掛けをするのではなく、安心して声を出せる環境と信頼関係作りが大切です。

子供にはいろいろなタイプがあります。昔と違って、全員に画一的に同じ指導法で対応するのは難しい時代に入ってきたのです。つまり、指導者が子供一人ひとりの特性を見定め、一人ひとりに最適な指導を的確に取捨選択し、個別に対応していかななくては、今の子供たちには指導者の言葉は伝わらないのです。

今、学級で出会う子供たちは驚くほど意識がバラバラだ、という点です。(略) 全員のゴールを一緒にしてしまうと、そこに乗れない子がいるんです。(略) 一人ひとりを深掘り・深読みしていかないといけないのです。(略) 昔のように、先生が一斉に「さあやろう」と学級全体に言って、学級が動く時代は、はっきり言って終わりました。(略) もう学級単位でみんなが一緒に考える時代は終わったのです。(略) それは親、地域、学校からの教育の影響です。教室は日本社会の縮図なのです。

『学級崩壊立て直し請負人』 菊池省三著・新潮社刊

PROFILE

■渡辺真斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



なぜ黙ってしまう子がいるのか？

●黙ってしまう子を作っていないでしょうか

“なぜ黙ってしまう子がいるのか？”、その子が生まれ持ったものもありますが、それは幼いときの経験に大きく左右されるのです。

①「うるさい、黙ってお母さんの言う通りにやりなさい！」
→“自分の意見は言わせてもらえない、なら黙っていよう”

※大人が指示命令を連呼し、子どもに話す機会を与えていない。家庭や道場でよくある光景です。

②「ダメ、全然違います」→“また間違えるかもしれないから、もう発表するのはやめよう”

※「一番に手を挙げて発表できました、素晴らしいですね。」

発表した意見も、先生は思いつきもしませんでした。大変おもしろい考えだと思いました」とまず挙手して発表した勇気をたたえ、答えが間違っているてもその意見を全否定しないこと。そのような前向きな受け答えを聞いて他の子も「発表しても大丈夫そうだと安心します。そのあとで「他に意見のある人いますか？」と聞いていくと良いですね。発表した勇気だけでも十分評価に値すると考えるのです。

③「何それ、ウケる！」→“自分から話したらバカにされてみんなに笑われた。先生がいっしょになって笑って、自分を助けてくれなかった”

※先生を信用・信頼していない。道場内で人の意見を馬鹿にする雰囲気をつくす。楽しく笑うことと、馬鹿にして笑うこととは違います。これを放っておくと、学級や道場内での“荒れ”が起こり、イジメなどがおこる土壌ができていきます。